

長尾 岳彦(愛知)

元旦ビューティ工業株式会社 中部支社

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦1丁目17-13 名興ビル6F  
TEL : 052-220-1051 FAX : 052-220-1052



## 屋根に求められる性能を全て実現!

近年の自然環境において、屋根はこれまで以上に高い耐久性や機能性が求められます。私たち元旦ビューティ工業の金属屋根

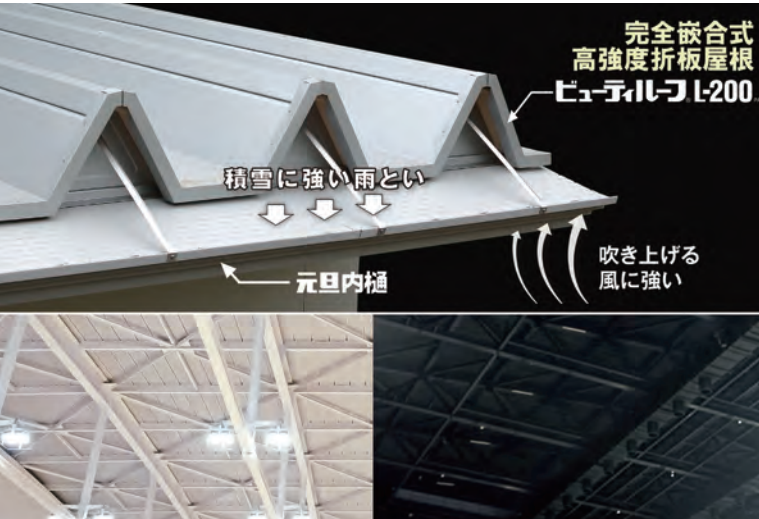
は見えない細部にまで長年の技術を駆使しています。当社が約40年前に開発した「嵌合式」屋根は、特殊形状の吊子に屋根材と

キャップを強固に嵌め合わせて強度と水密性を高め、釘やビスを使わないワンタッチ施工によって大幅な工期短縮を確立しました。以来、「完全嵌合式」は当社製品の基本となりました。

また昨年発売した「PASTEM-2」は、

断熱・吸音・遮音性能を満たす直天井を屋根上からつくることができます。従来の天井工事は屋根工事が完了した後に内装業者によって施工されますが、「PASTEM-2」の直天井は屋根施工と同時に施工ができるため、大幅な工期短縮と内部足場等の仮設費用を低減します。天井化粧材は穴をあけたパンチング仕様やカラー等、求める意匠に合わせて選択いただけます。

負圧の影響を受けやすい軒先には“雪や台風にも強く落ち葉が入らない”「元旦内樋」のご使用で軒先の強度を高め、雨といのメンテナンスを軽減します。これらの当社特許技術で様々な課題を解決し、「屋根に求められる性能を全て実現!」という強い意志で皆様のご要望にお応えしてまいります。



▲折板屋根には「PASTEM-2」Sタイプ

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



## CONTENTS

法人協定会通信 58

元旦ビューティ工業株式会社 表紙裏  
長尾 岳彦

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】

morinosに見る木造建築の設計手法

第3回 -日射熱制御と夏の実測- 2  
辻 充孝

第27回 JIA東海学生卒業設計コンクール2022

審査総評・講評 4

若林 亮・浅井 裕雄・宇佐見 寛・金山 美登利・渡辺 隆

受賞者の声 9

濱田 紗希・伊藤 稚菜・田中 葵・北村 海卯

審査に寄せて 10

奥井 康史

新連載：BIM が切り開く新たな創造性

第1回 ~プロローグ~ 11

横関 浩

2022年JIA本部総会報告と建築家会館本館 12

大瀧 正也

自作自演 251

コロナ禍で発見した奥三河の秘境 13

高藤 勝己

絵画と社交ダンス 13

田中 英彦

残暑広告 14

保存情報 第248回

登録有形文化財：県内最古の野間崎灯台 15

後藤 文俊

編集後記 15

石川 英樹・中澤 賢一

静岡発

カトリック清水教会 16

石橋 剛・土屋 和男

## 地域会だより 今後の予定

## ■ JIA東海支部

- ・ 9/2 第3回 支部役員会 (WEB同時開催)
- ・ 9/10 第9回 JIA東海住宅建築賞2022 第一次審査

## ■ JIA静岡地域会

- ・ 未定

## ■ JIA愛知地域会

- ・ 9/16 企業PR会、第4回役員会 (WEB同時開催)
- ・ 10/1・2 「WOODコレクション」モリコロパーク 一寸格子建築WS

## ■ JIA岐阜地域会

- ・ 9/15 第5回役員会

## ■ JIA三重地域会

- ・ 9/16 第4回役員会・第3回例会 (共にWEBのみの開催)

## Bulletin Board

## イベント

JIA 建築家大会 2022 沖縄オンラインイベント

## 建築家、コストをデザインする

パンデミック、ウッドショック、ウクライナ情勢など様々な要因から建築コストが高騰する中、建築を創るために建築家は日々闘っている。

ローコスト建築を提案するだけでなく、建築の資産価値を上げ、クライアントから予算を引き出すことも大切である。さらに、建築家の建築設計以外への職能の広がりにより、建築家に求められる役割が変化し、建築家のプロジェクトへの関わり方が多様化している。

クライアントにとって納得のいく、満足のいく建築のコスト(価値)をどうデザインしているのか建築家のチカラを発信したい。

・パネリスト (五十音順、敬称略) / 浅井 裕雄 (裕建築計画代表取締役)

畠森 泰行 (畠森泰行建築設計事務所代表)・小坂 幹 (日本設計執行役員・プロジェクトデザイン群長)

・ファシリテーター / 西田 司 (株式会社オンデザインパートナーズ代表)

■ 主 催 JIA住宅等連携会議

■ 日 時 2022年10月6日(木) 18:00~20:00

■ 会 場 ZOOMによるシンポジウム

■ 参加費 無料

■ 募集人数 300名

■ お 申 込 参加ご希望の方は下記アドレス又は右記QRコード

にてアクセスし必要事項を入力しお申し込み下さい

※定員になり次第締め切ります

[https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN\\_OtDtX4TZQF6foliYkWaMNw](https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_OtDtX4TZQF6foliYkWaMNw)

■ CPD単位：2単位

■ 問合せ先 mail@jutakjutak.ne



## 表紙 街で見かけた風景 ⑥ ▶ 「映える団地の、映える中庭」

西洋心理学の父、ウィリアム・ジェームズは、「マインドフルネス」とは「今の瞬間に生じていることに対して注意を払い、気づいている状態」であると考えた。一方「マイルドワンダリング」とは「今していること以外のことを考えている状態」であり、対極にある心の状態を行き来するのが、このシリーズのコンセプトである。

「ウェルビーイングの設計論」人がよりよく生きるための情報技術 2017年 ピー・エヌ・エヌ新社

写真は名古屋市長成団地のライトアップされた住棟の中庭



吉元 学 (JIA愛知)

ワークキューブ / 愛知淑徳大学



# 日射熱制御と夏の実測

## 1. はじめに

太陽の恵みは第2回で紹介した昼光のほかに熱エネルギーがある。昼光は1年を通して適度な光を取り込みたいが、日射熱の考え方は、夏と冬で逆転する。つまり、冬は取り込み、夏は遮るといふ、正反対のことを両立する必要がある。今回は、日射熱制御の考え方と、夏の実測分析を解説する。

## 2. 日射熱制御の考え方

日射熱制御において検討したいポイントは、①方位毎の日当たりや樹木、隣棟の影響、②季節や時間による変化、③ガラス面

の熱取得と熱損失など、複合的に考えて開口部を設計する必要がある。

まずは、建物周辺を航空写真と現地を確認する。北側はアカデミー校舎が近接しほとんど日が当たらないが、南は駐車場で開けていて影になる要素はない。東は演習林が迫っているため朝日は遅めである。西は下り斜面であるが、すぐ近くに桜並木がある。

そこで方針として、南と東に4m近い深い庇を出し、季節ごとの日射をコントロールし、西は桜並木の遮蔽効果を期待した。葉の無い冬期は日射を取り込み、夏は樹木

で日差しを遮る。

太陽の動きは風と違いほぼ確実に読めるため、日射熱制御の検討にはシミュレーションが効果的である。

図は、3月10日のシミュレーションと実際の日当たりであるが、ほぼシミュレーション通りに日射が入っていることがわかる。

次に、太陽は時間によって移動する熱源ということ忘れてはいけない。深い庇も朝夕の真横からの日差しには効果がない。ただし、夏と冬で日の出方位が異なり、冬の朝日は南東、夏は北東から昇る。

東の大開口部の検討において、最も寒い2月初旬は、南東から日が昇るため部屋の奥深くまで入り込み熱を供給する。一方、最も暑くなる8月上旬の朝日は、北東にある建物と演習林に阻まれて日射が差し込まない。8時頃ようやく建物に日射が当たり始めるが、日の出から3時間経ち太陽高度が上がるため東の4.5mの長い庇で制御される。

最後の検討は、ガラスの熱取得と熱損失のバランスである。ガラスは日射が入りやすいが熱が逃げやすい。morinosで主で使用したトリプルガラスは、熱貫流率U値1.5 W/m<sup>2</sup>K、日射熱取得率η値0.58(58%の熱取得)である。

グラフは、冬期の標準的な日射量と外気温の条件で計算した熱移動の早さである。濃い線が熱損失で、終日熱がゆっくり逃げて行くことがわかる。山なりの線が各方位別の熱取得である。南と水平面(屋根)が、最も熱取得が大きく、東西は、朝や夕方に熱が入ってくるが、最大でも南の半分程度である。

冬の熱収支で考えると、南はガラス面が大きな方が有利で、東西は少し不利になる。

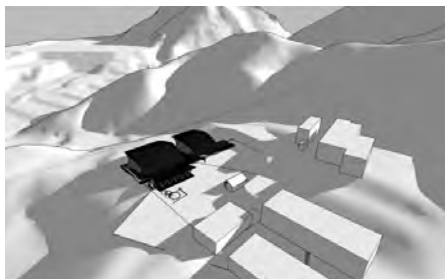
一方夏は日射による温度ムラができ、冷



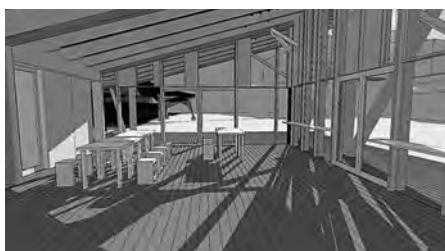
四角がmorinos。東に15°ほど傾いている。出典国土地理院撮影の空中写真(2008年撮影)



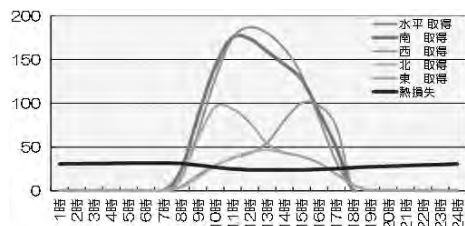
3月10日15:00の光のシミュレーション(上)と実際の写真(下)



2月1日9:00の南西からの遠景。周辺の山も朝の日差しに影響する。



2月1日9:00の内部の様子

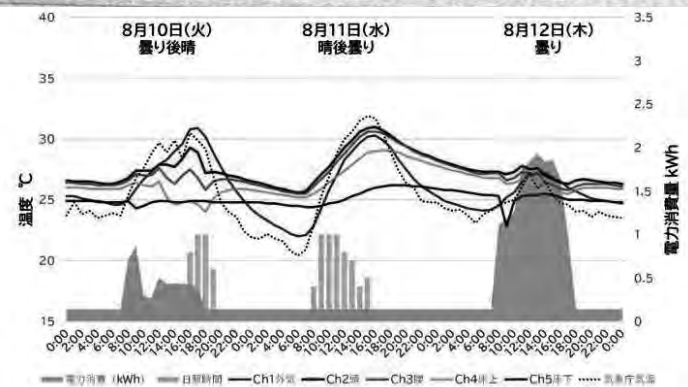


冬期のトリプルガラスの方位別、時間別の熱取得と熱損失 [W/m<sup>2</sup>]





室内のサーモ画像(表面温度は天井35.1℃、西側ガラス窓33.5℃、中央の左官壁29.9℃、床31.5℃)



2021年8月10日(火)~12日(木)の実測データ  
(折れ線グラフは温度変化:上下振幅が大きい線が外気温(実線:実測、点線:アメダス)、その他は下から床下、足元、腰高、頭の高さの室温、面グラフは消費電力量、棒グラフは日照時間を示す。)

房が効いた部屋で少し木漏れ日が降り注ぐのが好きという人や、夏の日射はやっぱ嫌い嫌で部屋の奥がいいなど、利用者が心地いい居場所を、季節や時間に合わせて探すのも楽しみの一つである。

### 3. 開放状態の夏の実測データ分析

morinosでは、室内外の5か所に温湿度データロガーを設置し、来場者の誰も見られるようにしている。設置場所は「北側の外部」「室内の頭の高さ」「室内の腰高さ」「室内の足元」「室内の床下」である。

最高気温38.1℃の猛暑を記録した2020年8月18日の室温を確認すると、13時の時点で、頭の高さが33.9℃、腰高が32.9℃、足元が30.0℃と、4℃ほど上下温度差がある。体験プログラムの実施中で開口部全開のため、外気温(36.8℃)と大きな差はない状況であった。

サーモ画像から左官壁の蓄冷効果が少し見て取れる。

また、日射の当たった屋根外部表面温度の実測値は66.2℃と高温だったが、天井表面温度は断熱材の効果で35.1℃であった。一方、無断熱のピロティ部の天井表面温度は45.7℃であり、不透明部位は断熱が入ることで、熱流入をかなり抑えることが実測でも確認できた。

### 4. 締め切り無冷房時の夏の実測データ分析

morinosの完全休館日で最も暑かった2021年8月10日(火)から12日(木)の3日間を分析する。

休館日(無冷房)の8月11日(水)は晴時々曇りで一日中日射があり、外気温の最高値は30.3℃(実測値)であった。

室内の様子を確認すると、明け方6時が最も涼しく、足元から頭の高さまで安定して涼しい環境である。(足元25.2℃、腰高25.5℃、頭25.6℃)

徐々に日射が入り室温が上昇する。12時には足元27.4℃、腰高28.8℃、頭29.3℃と暑くなった。14時には足元28.4℃、腰高30.2℃、頭30.6℃と、2時間で1℃程度上昇している。日照時間は半分くらいになってきたが、このあたりから徐々に西日の影響が出てくる。

最も暑くなった16時には、足元29.0℃、腰高30.6℃、頭31.0℃まで上がった。ここから室温が下がっていき翌朝は27℃程度に落ち着く。

高断熱のため外気が暑くなくても明け方の涼しい空気は逃げにくい、ガラス面から日射が入ってくるため、無冷房で閉め切っていると30℃を超える。しかし庇による日射遮蔽の効果で、外気温と同程度がそれ以下で、温室のような暑さにはなっていない。

仮に、断熱が弱いと屋根からの日射や、日射遮蔽が不十分だと温室のように50℃を超えることがある。

西日の影響を10日(火)の夕方を確認する。14時頃から晴れてきて、室温の上昇があり、14時には足元24.6℃、腰高26.3℃、頭27.7℃。16時には足元24.9℃、腰高27.5℃、頭29.3℃で最高室温を記録。これ以降は徐々に室温が下がる。

電力消費量を

見ると夕方に少し冷房を使用している。(1時間あたり0.4kWh程度で、17時には冷房を停止している。)

この時期の日没は18:50頃のため、桜並木による日射遮蔽とエアコンの緩い運転が効いていると考えられる。

また、日射による急激な温度上昇がみられないことから、室内仕上げの蓄冷によって、急激な室温上昇につながっていないことが考えられる。

### 5. おわりに

日射の考え方と夏の実測を紹介した。断熱と日射熱制御をしっかりすることで、安定した室内環境をつくりだすことができる。冷房設備を併用することで、緩やかな温度変化のある室内環境になり、自由な席移動で涼しい場所を見つけるフリーアドレスに対応できる。

最も暑い日の実測や絶対温度分析など、morinosのより詳しい内容は建築秘話(<https://www.forest.ac.jp/facilities/morinos/>)を参考

岐阜県立森林文化アカデミー  
教授 辻 充孝



南からの航空写真 morinosの西(左)側に桜の木が繁っている。(現在は手前に芝生広場が広がっている)



# 第27回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2022

5月28日(土)に「第27回JIA東海学生卒業設計コンクール2022」が開催され、受賞作品が決定いたしました。審査結果と講評、受賞者の声などを掲載します。

○【金賞】	「結び輪 ー地域に寄り添った新たな観光地の提案ー」	濱田 紗希 (名古屋工業大学)
●【銀賞】	「郊外の柚人 ー週末林業による道具や資本を転換した市場経済外の暮らしー」	中井 勇気 (名城大学)
●【銀賞】	「住分解 ー規格化の再解釈による都市的場所性の創出ー」	伊藤 稚菜 (愛知工業大学)
●【銅賞】	「日常の波紋 ーまちを巡る親水空間ー」	田中 葵 (静岡理科大学)
●【銅賞】	「路地建築はつなぐ ー改修事例から読み解く再建築不可建築の可能性ー」	北村 海卯 (大同大学)
【入選】	「呼吸する建築」	有田 晃己 (静岡理科大学)
【入選】	「アカリとカタチ ー建築が 照明となり 変化するー」	渡辺 安紀 (名古屋工業大学)
【入選】	「遊動の遺伝子」	中山 朋紀 (名古屋工業大学)
【入選】	「まちを耕す」	原 希望 (名古屋工業大学)
【入選】	「50年の乱反射」	直井 和希 (大同大学)

審査員長



若林 亮  
日建設計

審査員



浅井 裕雄  
裕建築計画

審査員



宇佐見 寛  
アトリエ ルクス

審査員



金山 美登利  
モヴ構造設計

審査員



渡辺 隆  
渡辺隆建築設計事務所

## 審査総評

以前は毎年の恒例であったJIA卒業設計コンクール。昨年はコロナ禍の影響で3年ぶりに開催され36作品の応募があったが、今年は22作品の応募に留まった。応募数が減少したことは残念であるが、いずれも力作揃いで、改めて応募して下さった皆さんには感謝を申し上げたい。来年はより多くの応募を頂けるよう、応募要項を早めに告知するなどの工夫を行い、より多くの応募があることを期待したい。

一次審査は5月8日、全審査員が事前に応募作をよく読み込んだ上で、オンラインで行った。ディスカッションを重ね、2度の投票の結果、10作品を選定した。

傾向としては、昨年は数件あった研究を基にした卒業設計が少なくなり、「まち」を

良くする起点としての建築やリノベーション、「みち」「路地」のあり方に着目したもの、地域の活性化や再生をテーマとしたものなど、いずれも学生の視点で社会を観察し、感じたことをテーマにした作品が多くあった。

二次審査は5月28日。感染者数が落ち着いていた時期でもあり、会場施設内の別室からオンラインでプレゼンテーションと質疑応答を行って上位5点、入選5点を決定。その後、審査会場に上位5名が加わり、審査員と対面でのやり取りを行って作品の理解を深め、投票と討議の結果、金賞1点、銀賞2点、銅賞2点を決定した。それぞれの講評は次頁以降に委ねるが、建築は社会性のあるものであり、これを踏まえた論理

と考察、これを建築に結実する過程が素直に表現され、一方で環境、SDGsへの取り組み、構造、法規などの現実性がある作品が選ばれたと思う。また、作図は単なるCGだけではなく、これに手を加えたものや手書きのドローイングなど、熱意を感じる表現が多くあったことも嬉しいことであった。

いずれにしてもこの地域の実務者である私達にとって若い世代の新たな視点はとても新鮮で、多くの刺激を受けたことに感謝したい。



審査員長 若林 亮

◀ 金賞 ▶ Gold prize

「結び輪 —地域に寄り添った新たな観光地の提案—」 濱田 紗希(名古屋工業大学)



【講評】

知多の新舞子の海岸、SUP (Stand Up Paddleboard) の聖地にスポーツツーリズムとして訪れる人々と、これらの人々を迎える地域の人々との交流の「輪」をつくらうとする作品である。

橋の袂に元々あった円弧状の堤防や海岸線のカーブをなぞるように大小2つの輪が描かれ、それに滞在、交流、地域の3つの輪を重ね、その輪や橋に沿って小ぶりの三角フレームのフォリーが浮かんでいる。「する」「みる」に加えて「支える」といったSUPを通じての様々な交流、訪れる人と地域の人それぞれの役割が表現され、その行為を建築として可視化する試みがなされている。

円は「車座」に通じる互いを見合う形で

あり交流の形が素直に表されていて、小さなまちでの交流に現実味を感じることができた。

秀逸と感じたのは、輪に並ぶフォリーを均質な円の中に敢えて均等に並べず、固さを感じさせないように工夫されていること。ドローイングにあるきれいな海の青色と白い波の表現が清々しく、さらにハレの日には幕の屋根が持ち上がる演出、その幕屋根のいくつかは風に煽られている…。波音や風、SUPに乗る人、それを見る地域の人々の歓声、作者の中にあるイメージがしっかりと表現されている。

また、環境改善装置として、浮かぶフォリーの脚元に浮遊ゴミの収集装置があり、収集したごみを分別して建築資材へと再生

する仕組み、フォリーの中や床下には水耕栽培の仕組みがある。単なる地域交流の創出だけに留まらず、海をきれいにして地域に還元してこそ、街の価値が生まれるとの作者の想いを感じた。

その環境への提案や僅かなことかもしれないが地域に利益を生む提案を含め、コンセプトを構築する力、造形力、表現力とも極めてバランスの良い作品であった。

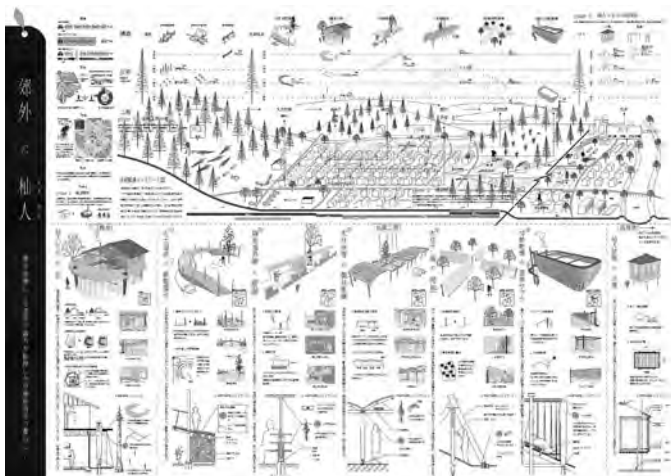
卒業設計には、学生時代に学んだことや社会に対して感じたこと、自分の頭や手に育んだものを表現することが大切である。この作品はその成長を感じる力作であり、これからの活躍を楽しみにしたい。

審査員長 若林 亮



⇒ 銀賞 ◀ Silver prize

「郊外の柚人 —週末林業による道具や資本を転換した市場経済外の暮らし—」 中井 勇氣 (名城大学)



【講評】

かつて林業が盛んであった岐阜県美濃加茂市において、閉ざされた木材供給のフローを飛び越えて消費者を里山に呼び込もうというプロジェクト。身近にある里山資源を郊外の住民たち自身で管理し、その資源をきっかけに住民自身の生活がお金ではない関係性で豊かな街を形成することを目指す。そこへDIY愛好家も取り込み街づくりをしようという案である。

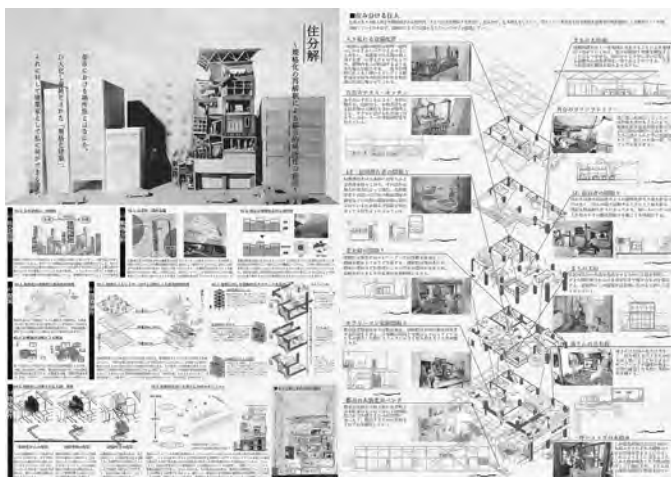
平成22年の「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」制定以降、多くの木質建築が実現しており、建築物の木質化の流れは加速し続けている。ところが、木造の設計をしてみるとRC、S造の建築資材とは異なる材料供給の流れに気づかされる。国内の木材自給率は増加傾向にあるものの建築材料としての自給率はさほど増加していない状況であり、海外からの流通量が不足するとたちまち市場価格は大荒れになる。経済、環境の両面で山の保全が大きな課題であることは周知のことであるが、衰退している林業を活発にする手立てとなると遠く離れた職域の話で国に何とかして欲しい。と願うばかりであった。

中井さんの案は、個人の管理から集団での管理へ移行させ、身近なところから始めようという働きである。週末に林業に携わりながら自分たちの環境を手作りしようという案は、清々しく好感が持てる。木材市場全体からみると微力なのかもしれないが、このような活動を通して、林業に関心を持つ人が増加し、一般の方たちにとって身近に感じるきっかけとなる可能性を多分に秘めている。

審査員 金山 美登利

⇒ 銀賞 ◀ Silver prize

「住分解 —規格化の再解釈による都市的場所性の創出—」 伊藤 稚菜 (愛知工業大学)



【講評】

難解な作品である。プレゼントを読み込むが、頭の整理がつかなかった。しかし、惹かれる何かがある。

再読してみて、実はかなり合理的な構成をしていることが理解できた。

計画地は名古屋市中区錦長者町繊維問屋街。ご存知のとおり、繊維業から用途が変革中の街で、ビルの未利用スペースも問題になっ

ている。この作品では、2つの余白の作り方を提案している。1つは未利用のスペースを庭にし、「閑所」として読み解く。もう一つは、ビルの建築のコアを分解することで、余白をつくらうとした試みである。

街の断面的構成をグランドレベルの2階までは本業の繊維問屋として、中間階はオーナー住居を始め、定住型の住居と学生などの流動的住居を配置。上階は食堂や銭湯といった地域の利用できるサービス拠点を配置している。コアである階段も分解しているので、地域サービスの上階へは、「閑所」である庭をアプローチしながら、上へと上がっていくことになる。

私達は潜在的に「あまり」を抱えている。長者町のビルのように、グランドレベルより上の階は、利用率が低下して「あまり」になってしまう。その街に庭をポーラス状に点在させて、コミュニケーションの場として立体的に街を使う試みは、近年、卒業設計の提案で多く見られる街や建築物を社会インフラとしての位置づけの試みともいえる。

この作品の難解で魅力的な理由は、プレゼが下手であることと作品から見えるアノニマスな魅力である。作者は本編で「規格化」とする設備コアを取り除くことで、建築家に「ほら、暮らす人に寄り添って建築をしてみなさい。」とうたっているようだ。

審査員 浅井 裕雄

## ⇨ 銅賞 ⇩ Bronze prize

### 「日常の波紋 —まちを辿る親水空間—」 田中 葵 (静岡理工科大学)



#### 【講評】

計画地は、静岡県浜松市にある、佐鳴湖を舞台に、湖岸周辺に地域を活性化させる施設を計画をするものである。まず、このような湖、海などに接する計画は卒業設計にて多く取り上げられるテーマである。やはり、その土地の持っているロケーション、敷地の潜在能力が高いため、その地域をより良くしていこうとするのは自然な流れであるが、その場合、湖岸の一部分や、海岸の一部にとどまることは少なくない。

エリアが広域にわたるため一部の計画にとどまることがほとんどの提案となる。

だが、今提案では、湖全周にわたって、地域性などを中心に現地調査を丹念に行い、それぞれのエリアでの計画も提案していることが、とても好印象であった。

メインとなるエリア、施設の計画案も、動線を一本通し、空間的にも中間領域のような扱いで、明確にゾーニングされている。構造体も木質系(集成材)の技術を多用した形態としていて、環境、デザインに配慮された提案となっている。地域性に配慮しながらも、新たな空間、建築デザインを取り込み、水面を模したような、柔らかな曲線、逆アーチを描く屋根架構が外観の目を引く。そのことが、この地域のシンボルとなり、地域活性化の一躍を担うよう検討されていると感じる。屋根架構の防水、外部、内部の境界が不明瞭な部分もあったが、設計の意図する形態などは評価することができる。今後、この屋根架構の仕上げや、経年劣化に対する対策などを、今後の課題としていただきながら、更なる飛躍を期待したい作品となっている。

審査員 宇佐見 寛

## ⇨ 銅賞 ⇩ Bronze prize

### 「路地建築はつなぐ —改修事例から読み解く再建築不可建築の可能性—」 北村 海卯 (大同大学)



#### 【講評】

路地は昔、玄関先を、その住人が開発していくとで、住みて側から公への「はみ出し」行為が、人の顔が見える生活道となり、積極的な暮らしが連想された。この作品は、路地から私有地への公の「はみ出し」行為である。再建築不可は、建築基準法の制定から将来の都市計画への移行について、当時の行政側のイメージより遅く、もしくは思惑と違う、減少というキーワードが社会の歪を生み出しているか

ら、この作品も不合理を肌で感じ取り、この研究から始めているのだと思う。

この作品は、所有権や法的境界線などが建築基準法制定以前の緩やかな関係性を共有といったテーマをかかげることで街区の中央に人の集まる場を集約している。それは、以前、見ることができた路地の狭くて、濃密な固有性の連続的魅力とは正反対な明るく、にぎやかな世界観へと変わっている。ここで少し疑問も湧いてくる。住宅街区の中央ににぎやかな変革は、もともと暮らしていた人たちの分断は起こらないのだろうか。

再建築不可なエリアは繁栄から衰退へとたどってきた。スポットライトのあて方も色々あっていいと思う。暗がりから少しの明かりを受け取り、更に次の時代の変化を待ちかねるような弾力的な解決も見てみたい。

最後に、この作品のアプローチとして、計画地へ何度も足を運びフィールドワークや調査といった、実直な手法と課題解決のアイデアをもった、卒業設計にふさわしい誠実な作品に出会えたことはとても嬉しい。

審査員 浅井 裕雄



⇒ 入選 ⇐ 「呼吸する建築」 有田 晃己 (静岡理科大学)



【講評】

模型写真が魅力的で注目した作品であった。迫力のある建築を計画することは卒業設計の醍醐味のひとつだと思う。この計画は浜名湖の人工島に環境を調整する装置としての建築を作るというもの。これが長い年月をかけて朽ちていき自然と共生するという意図は、生物の骨のイメージを引用していることから理解できる。ただ、巨大な高架(車道)

の新設は少し強引な印象を受けた。今、高度経済成長時代に建設された橋やトンネルや建築物の修繕に苦勞しているケースがとても多い。「ストックの維持と活用を考える=新築を丁寧に繊細に考える」ということだと思う。大胆さを失わず、謙虚に建築に向き合い続けて、より良い設計者になって欲しい。

審査員 渡辺 隆

⇒ 入選 ⇐ 「アカリとカタチー建築が照明となり変化するー」 渡辺 安紀 (名古屋工業大学)



【講評】

都市化により人の意識から遠くなった隼人池。生物に光害を及ぼす街灯をなくし、照明器具となる図書館が生物にもやさしい「アカリ」を灯して人を導く。その発想に魅力を感じた。また、池に浮かぶ図書館の幾重にも重なる花びらのような壁が反射板となり大きな膜屋根を照らす一方で、花びらの隙間から漏れた光が水面を照らすデザインも

巧みである。池や図書館のボリュームに対して膜屋根が大きく感じたこと、昼の水面に反射する光がつくる内部の環境が語られていなかったことが残念だったが、これからもこの作品にあるように細部まで丁寧に「カタチ」にすることを大切に成長されることを楽しみにしたい。

審査員長 若林 亮

⇒ 入選 ⇐ 「遊動の遺伝子」 中山 朋紀 (名古屋工業大学)



【講評】

画一化された開発に対しての問題提起。現代日本の問題ゆえにこの作品に対しては審査にもリアリティがあった。この形態が住宅地に馴染むか。ダイアグラムにもあるが、現在の地形を生かし、細分化されたスラブを地形に合わせ、かぶせていく。スラブには人工土壌を配し、緑化していく。スラブ下の空間に住空間などが起伏に富ん

だ魅力的な空間が創出される。また、細分化されたスラブの隙間から、光などの自然の要素が落ちてくる。周辺環境との検討をより深くしていけばより良いものになると考える。今後の活躍が楽しみな設計者である。

審査員 宇佐見 寛

⇒ 入選 ⇐ 「まちを耕す」 原 希望 (名古屋工業大学)



【講評】

安城駅前が使われなくなった立体駐車場を地域住民のための農地へ転換するプロジェクト。廃墟が緑豊かな建物へ変貌し、野菜を自分で作り収穫する幸福感も得られる。あっても良さそうなのに今までに無いコンバージョン。「今までにない。」には何かしらの原因があるのではないか。大地から浮いた床版で、目的となる作農が本当に可能な

のか。その点においての根拠が建築、農業の側面からもう少し具体的に示されていれば可能性を感じながら作品を拝見できた。この先も是非、突き詰めていただき、都市部住民にとって素晴らしい施設となり得る可能性を見出して欲しい。

審査員 金山 美登利

⇒ 入選 ⇐ 「50年の乱反射」 直井 和希 (大同大学)



【講評】

活気を失った古びた街並みを再生させる計画。同じような状況は各地で見られ、そこで住人たちの暮らしを支えてきた建築は、理由はさまざまではあるが違法な増改築がなされている場合も多い。この作品では9つの小さな改修方法を提示し、50年という年月をかけて、合法化とライフスタイルの変化への対応を同時に達成しようと試みている。

コンプライアンス・環境対策・災害対策が急務な昨今、建築の専門家がない街に入って寄り添っていくことはとても大切で、そのひとつの手法を示していると思う。徐々に変化していくことの豊さ・居心地の良さ・それによって生まれる街並みの魅力がもう少し伝わってくるとなお良かった。

審査員 渡辺 隆

## 受賞者の声

## ⇒ 金賞 ⇐ 「結び輪 —地域に寄り添った新たな観光地の提案—」



濱田 紗希  
(名古屋工業大学)

「ちょうどいいまち新舞子」から「世界の新舞子」へ。魅力ある資源を発信する建築のあり方がこの地には必要だと感じ、卒業設計をおこないました。

地元である愛知県知多市の新舞子海岸は、スタンドアップパドルボード(SUP)が有名な聖地ですが、世界選手権の認知不足など、観光資源として成立していない課題があります。特殊な地形を通して日常生活から大会まで変化する人々の行為を観光資源と捉え、地域の魅力を

発見し世界の拠点となる建築のあり方を提案しました。

敷地の特徴から抽出された計画の指針を形成する「輪」と、行為を可視化する「枠」が重なるように、全体のプランニングから細部のデザインを包括的に捉えている点を評価していただいたと思っております。

最後に、卒業設計を行うにあたりご指導してくださった先生方、先輩方、共に切磋琢磨した同期に深く感謝申し上げます。

## ⇒ 銀賞 ⇐ 「住分解 —規格化の再解釈による都市的場所性の創出—」



伊藤 稚菜  
(愛知工業大学)

大地の上で人間が活動する際、暮らしに豊かさを求め人間の欲求から建築がモノづくりによってつくられた。しかし高度経済成長期、建築は機械的につくるために規格化されたことでモノづくりから離れ工業製品となってしまった。そんなビルがひしめき建つ名古屋市長者町。かつては繊維問屋街として都市ウラの賑わいを見せていたが、職住関係と流通構造の変化とともに衰退した。

“都市における場所性とはなにか” 匿名性の高い都

市において建築家が形式的に建築をつくることに対し、疑問をもつ。時間や暮らしが積層しにくい都市でも、それを積層させるのが建築家の役目であると考え。滝さんのビルをケーススタディとし都市ウラのビルの新たな役割、自分は建築家として何ができるのかを考え、土地の区画・ビルの構造と巨大化し単純化された「規格」を住民に再解釈させることで都市における場所性はなにかを試考する。

## ⇒ 銅賞 ⇐ 「日常の波紋 —まちを辿る親水空間—」



田中 葵  
(静岡理科大学)

地元の日常風景から、少子高齢化やコミュニティの衰退、過疎化など多くの街がこれらの問題に直面していることを再確認しました。そこで、近年増加傾向にある「まちやど」のような、循環を活かした形態を基本とし、静岡県浜松市にある「佐鳴湖」を通して暮らしが滲む公園への再編を提案しました。

一周6kmという稀有な規模感の湖を軸に場を点在させ、まち全体を巻き込むことで、まちづくりとライフスタ

イルの可能性を広げます。今回先生方にはネットワークと屋根の形態や建築の持つデザイン性を評価して頂きました。まちのポテンシャルを引き上げつつ、機能と形態が伴う設計が出来たと感じています。

最後に、卒業設計を長きにわたり指導して頂いた先生方や設計を支えてくれた同期、先輩、後輩の皆さんに深く感謝申し上げます。

## ⇒ 銅賞 ⇐ 「路地建築はつなぐ —改修事例から読み解く再建築不可建築の可能性—」



北村 海卯  
(大同大学)

建築と建築、まちの関係性の一つとして路地があり、路地と建築の関係に関する課題の一つとして再建築不可建築がある。再建築不可建築は接道義務を果たしていない為、現状として放置されてしまい空き家となる傾向がある。本提案は再建築不可建築を路地と建築の一体的な利活用を行うことで路地に人の生活空間を溢れさせ、新しいまちの回遊性が生まれることを目指しました。

再建築不可建築について探求することができ、私なりの解答を発表させて頂きましたが、施工や防火、プライバシーにおいて不十分な点があり、今回審査員の皆様から頂いた言葉を受け止め考え続けていきたいと思っております。最後に、この場をお借りしてご指導してくださった先生方、先輩方、支えてくれた同期や後輩の皆さんに深く感謝申し上げます。



## 審査に寄せて

### ■コンクール報告

昨年に引き続きオンラインを併用し、第27回JIA東海学生卒業設計コンクール2022を開催しました。

審査委員長を若林亮さん、審査員を浅井裕雄さん、宇佐見寛さん、金山美登利さん、渡辺隆さんに担っていただきました。

#### ◇1次審査

オンライン非公開で実施しました。応募資料22作品を事前に読み込みみんだ上で、まずは各審査員がそれぞれ10票を投票しました。5票1作品、4票4作品、3票4作品、2票7作品、1票3作品、計19作品に票が入りました。この結果をもとに審査員で協議し、5票、4票の計5作品と審査員の議論により選定された5作品を合わせた10作品を2次審査に進めることに決定しました。

### ■コンクールを終えて

昨年、3年ぶりに再開した本コンクールを今年も無事に開催できからホッとしています。昨年に続きコロナ禍における審査であったため、オンライン審査とせざるを得ない状況でした。しかし、当時はコロナも少し落ち着いていたこともあり、2次審査は対面できないかという要望が審査員から出ました。実行委員としては、昨年と同じ形であればスムーズに進行できると思っていたのですが、対面となるといろいろな検討が必要なため少し後ろ向き意見もありました。昨年も良い審査だったので対面でやる価値は何なのか、この時期に対面を強要してよいのか、選択にした場合、対面が否かで審査に影響があるのではないか、などいろいろな意見が出されました。しかし、最終的には、応募者にとってより価値のあるコンクールと



▲ Zoomウェビナーでは配信されていない2次審査会場裏の様子



▲今年の2次審査は応募者と審査員が会場に集まり開催

#### ◇2次審査

今年の2次審査は応募者と審査員が会場に集まり開催しました。1次審査通過者10名が5分間のプレゼンテーションと約10分間の質疑応答をしました。まずは審査員が各5票を投票し、5票2作品、4票1作品、3票1作品、2票3作品、1票2作品となりました。1作品ずつ議論した後、審査員が各4票を投票し、5票2作品、4票1作品、2票2作品、1票2

するために、審査員との対面での対話はもちろん、終了後の公式でない場での意見交換や、発表時間以外の応募者同士の意見交換など、リモートではできない価値の大切さを共有し、その実現に向け検討することにしました。

まずは会場探しから始めました。昨年は審査員だけの参加でしたので、JIA事務局で開催できましたが、応募者10名も含めるとなると事務局には入りません。いろいろな会場を探しましたが、オンライン公開審査となるとWi-Fi環境は必須で、費用も含めて考えるとその条件を満たすところがなかなか見つかりませんでした。ポータブル機器を持ち込むことも検討しましたが、通信の安定性、費用、設置作業を考えるとなかなか現実的ではありませんでした。試行錯誤の結果、結局、事務局内に審査員5名と発表者5名のスペースを設け、事務局のある昭和ビル内に控室を設け、両方を行き来したり、2元中継したりすることで対応することでようやく実現にこぎつけました。

審査員と実行委員の数か月にわたる周到な準備のおかげで、コンクールは無事に開催できました。また、審査員のみなさんの白

#### コンクール経緯

■応募:2022年4月20日~4月30日  
東海地方の8大学22名から応募

■1次審査:2022年5月8日  
非公開オンラインで審査し  
10作品を2次審査に選出

■2次審査:2022年5月28日  
応募者、審査員は会場に参加。  
Zoomウェビナーでの公開審査  
金1作品・銀2作品・銅2作品  
入賞5作品を選定

作品となりました。そこで、2票以上の5作品を金・銀・銅賞に決定しました。次に各賞を決めるための熱い議論をし、最後は重み付けをした投票を2度行い、最終的に、金賞1作品、銀賞2作品、銅賞3作品、入賞5作品を決定しました。そして、金・銀・銅の5作品をJIA全国学生卒業設計コンクールに出展することに決定しました。

熱した議論により、とても内容の濃い審査になり、コンクールとしての成果を残すことができました。この場を借り、審査員のみなさん、大瀧支部長、水野前支部長、森さん、上原さん、矢田さん、澤さんはじめ委員の皆さんに感謝申し上げます。また、本コンクールの趣旨に賛同いただき、協賛いただいた皆さんにもこの場を借りてお礼申し上げます。

この2年間、一定の成果を上げることができたと思いますが、まだまだ改善の余地は多くあります。その改善のためには、より多くのみなさんの知恵と熱意が必要です。「将来を担う学生の力になりたい!」、「なんか面白そう!」など、どんな動機でも構いませんので、実行委員として運営に関わってみませんか?建築の質の向上と建築文化の発展のために、この地域の学生の成長を支えるこのコンクールを継続させ、更に価値のある活動に発展させるために、みなさんの力添えが必要です。よろしく願いいたします!

奥井 康史 (JIA愛知)

石本建築事務所



## ～ プロローグ ～

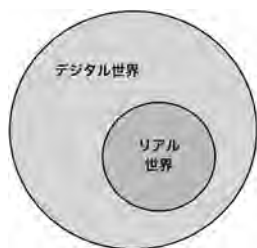
## 1. BIMは設計に何をもたらすのか

## BIMの本当のインパクト

BIMは手書きからCADへの移行が起きた時とは比べもにならないインパクトを設計にもたらすと考えられています。その最大の理由が、建物自体がデジタル情報に置き換えられ、データベース化され、建築をコンピュータが自在に扱えるようになったことです。設計業務の効率化は、BIM効果のほんの一部でしかありません。最大のインパクトはデータベース化された建築が、デジタル世界に接続され、無限の拡張性を手に入れたことです。

## 一般化するデジタルと貴重化するリアル

そのデジタル世界ですが、こちらも状況が変わってきています。現在考えられるデジタル世界とは「リアル世界がデジタル世界に包含」される世界です。デジタルで情報がなにもも繋がる社会では、もはやデジタルが当たり前最初の経験となり、リアル体験は人の経験全体の「特別なもの」となりつつあります。音楽を聴く時、音楽のデジタルデータをデバイスでダウンロードして聴くというのが一般的で、コンサートなどの生演奏は特別なものになっているのと同じです。



リアルがデジタルに包含される世界。リアルから見ると世界がデジタルでただ拡張したように見える。

## デジタル空間と建築の可能性

ではデジタル空間と結びついた建築はどのような可能性を手に入れるのでしょうか。デジ

タルデータ化された建築はその建築自体を「いかようにも」加工、利用することが出来ます。それは単なる図面上の数量拾いであつたり、形の検討のようなものだけではなく、複雑なシミュレーションが行えるようにことを意味し、もっと言えば、これまでにない新しい考え方や、人が意図しないような検討や分析などが可能になることを意味します。更にはそれらで得られた結果をフィードバックすることも可能になるためオリジナルを改変・進化させることも容易になります。そして圧倒的に検討数を増やすことが可能です。

## 2. 創造性を読み解く

## 創造とは、これまでにない新しい価値を生み出すこと

新しいことをしたとしても、そこに価値や有用性がなければそれはただ新奇なだけで創造とはいえないということです。では一体どうすれば新しい価値を生み出す創造性を獲得できるようにされるのでしょうか。

## 「生物の進化と人の創造性の構造は似ている」

この一文だけでワクワクしないでしょうか。これは「進化思考」の著者太刀川英輔氏が「だれもが創造的になれる創造性の磨き方(2021.10.04)KOKUYO」でネットに公開されている記事に書かれていることです。この記事は非常に面白いので是非一読することをお勧めします。

## 変異と適応の繰り返しが生む



※出典:太刀川 英輔著、進化思考、海士の風、2021.P55

その中で進化=創造性には、変異(エラー)と適応(選択)の繰り返しで起きていると書かれています。

変異は偶発的に起きるもので、適応は必然的に行われるという生物の進化を人の創造性に置き換えて考えている点が非常にわかりやすく面白いです。であるなら、それが起きやすい環境を作れば創造的になりやすくなることとなります。ちなみに、前述の記事では変異を9個、適応を4個に分類しています。アイデアを考える上でのこの分類に似たものを、どこかで見たり聞いたことがあるのではないのでしょうか。

## 変異(エラー)

変量、擬態、欠失、増殖、転移、交換、分離、逆転、融合

## 適応(選択)

予想(未来)、系統(過去)、解剖(内部)、生態(外部)

これらを活用すれば創造性が増すのであればすぐにでも活用したいですね。

## 3.次回に向けて

変異や適応を促すためにBIMができることは何なのか、最近話題のコンピューショナルデザインはそこにどう動くしているのか、実際にBIMを使いながら創造性を発揮している人はどう活用しているのか。次回からは、創造の出発点となる変異について考えていこうと思います。BIMを通して創造の何が見えるのか。回を進めるごとに、変異を起こし、別の形に適応してしまったりしてもどうかご容赦ください。よろしくお願いたします。

横関 浩 (JIA愛知)

スタンスアーキテクト  
フローワークス







建築家会館本館 外観



建築家会館本館 エントランス階段



建築家会館本館 中庭



建築家会館本館 テクスチャー

## 2022年JIA本部総会報告と建築家会館本館

令和4年6月29日、JIA本部 建築家会館（東京）において「2022年度通常総会」が開催されました。一定の収束を見せていたコロナウィルスでしたが、再感染拡大の兆候を感じながらの開催となり、新旧理事の30名での参加となりました。

必要定足数1,647名（会員の50%）に対し、出席者30名、書面表決921名、委任状933名、合計1,884名（定足数を満たす）によるものとなりました。議長選任の後、

1. 2021年度会計財務諸表承認の件
2. 会員規程一部改正の件
3. 理事及び監事選任の件
4. 名誉会員選任の件

以上について審議され承認されました。その後の理事会で会長・副会長・支部長が決定し、本部各委員会メンバーが承認されました。

次に、佐藤新会長より所信表明があり、「JIA会員は地域での地道な活動を通して行政と信頼関係を築き、若手も活躍している。建築家が地域で頼りにされ、その建築家にとって頼りになるJIAが理想であり、『頼りになる建築家、頼りになるJIA』をスローガンとして活動していく」とされました。佐藤新会長の分かりやすい言葉での説明は、説得力があり、人肌感のある好感度の高い話でした。私も日頃より興味があった「近江商人の家訓：客良し・自分良し・世間良し」の「三方良し」の話はたいへん参考になりました。（支部会員の皆さんには、新聞記事等を配信済みですので、御覧ください。）

今回、総会、理事会をもって正式に2022年度がスタートすることとなり、私自身、身の引き締まる思いで参加致しました。

これから任期期間中、支部の皆様には、どうぞ宜しくお願い致します。

また、総会が開催された建築家会館本館は、前川國男氏の提唱する「処士横議の場」として設計競技により選定された「進来廉氏」設計により1968年竣工しました。その名の通り各界、各分野の方々との交流の場として、その存在意義を発揮し、活況を呈したとの事です。

その佇まい、足を踏み入れた印象は、先人たちの思いや考えが感じられる雰囲気が今でも漂っています。皆さんもぜひ訪れることをお勧めいたします。



大瀧 正也（JIA静岡）

JIA東海支部長



水野前支部長（感謝状を受取られました）



総会風景

## コロナ禍で発見した奥三河の秘境

奥三河に、全国に誇れる秘境があることをご存知でしょうか？一昨年からの新型コロナウイルスまん延の影響で県境を越える移動の自粛が求められていた中で、新城市を二度訪れました。そこで、鳳来寺山や長篠古戦場などの有名な観光地だけでなく、この周辺には、あまり知られていない素晴らしい自然がたくさんあることを発見しました。その中から、私



乳岩峡

が是非全国にアピールしたい二つの秘境を紹介します。

一つは、湯谷温泉東の鳳来湖北東部の山麓にある「乳岩(ちいわ)峡」です。2時間～3時間ほどの乳岩川沿いの少し骨のあるハイキングコースになっています。凝灰岩からなる巨大な岩によるダイナミックな景観と僅かな光が差す鬱蒼とし、苔むした森は、屋久島の白谷雲水峡を連想させ、この辺りはまさに「愛知の屋久島」と呼ぶに相応しい所です。

もう一つは、東部の巢山高原にある「阿寺の七滝」です。駐車場から900mの散策路の先にその滝はあり、水が7段に流れ落ちる美しい滝となっています。辺り一帯は深い森で、



阿寺の七滝

こちらにも巨石や巨木が一面に苔で覆われ、神秘的な気配を漂わせています。

湯谷温泉駅近くの宇連川沿いに数軒ある人間味溢れるおもてなしの温泉宿或いはちょっと贅沢にその奥の榎原溪谷沿いにある150年前の合掌造りを移築した宿に泊まり、奥三河の秘境を巡る週末を過ごしてみても如何でしょうか。



高藤 勝己 (JIA愛知)  
大建設

## 絵画と社交ダンス

初給料で油絵用具一式購入し、休日に外かけて数枚描いて中断、53歳(2005年7月)にUIAイスタンブール大会に参加して描いたスケッチから、再開に火が付きしました。これが2006年のJIA愛知美術サロン設立へ繋がり、現在の美術サロン展(第15回は2020年からコロナで延期中)に至っています。30～40代には全く筆を執る気が起きませんでした。多忙の日々で、芸術などへのゆとりがなかったのでしょう。並行して2007年からJIA愛知美術サロンのメンバーと2～3か月に1度ヌードデッサン会で芸術的感性の基礎修練(?)をしています。建築家憲章にも、芸術的感性に基づく云々とありますが、仲間が増えないのが悩みです。

社交ダンスは8年目となり認定テストはブロンズ級までにして、基本に戻ってフィガー(足型)を習得しています。音楽

に載れてパートナーと満足することをイメージし、健康も兼ねて片鱗を楽しんでいます。こちらもメンバー(特に男性)募集中です。



ヌードデッサン(15分)



社交ダンス(ルンバ)



田中 英彦 (JIA愛知)  
連空間都市設計



# 残暑お見舞い申し上げます

(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

<p>(同)石橋剛設計事務所</p> <p>代表社員 石橋 剛</p> <p>〒410-2114 伊豆の国市南條1391-9 TEL: 050-3786-1484 FAX: 050-3730-5082</p>	<p>(有)聖建築設計事務所</p>  <p>代表取締役 大瀧 正也</p> <p>〒424-0923 静岡市清水区幸町10-38 TEL: 054-334-2654 FAX: 054-334-6468</p>	<p>(株)高橋茂弥建築設計事務所</p>  <p>常務取締役 大橋 康孝</p> <p>〒420-0847 静岡市葵区西千代田町 29-30 TEL: 054-246-2731 FAX: 054-247-0113</p>
<p>(株)伊藤建築設計事務所</p> <p>取締役会長 森口 雅文 代表取締役社長 小田 義彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 桜通ビル TEL: 052-222-8611 FAX: 052-222-1971</p>	<p>(株)岩崎設計事務所</p> <p>代表取締役 岩崎 英一郎</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-24 TEL: 052-231-8787 FAX: 052-231-8827</p>	<p>(株)城戸武男建築事務所</p> <p>代表取締役 城戸 康近</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内2-11-23 富士和ビル2F TEL: 052-231-5451 FAX: 052-231-5450</p>
<p>(株)黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川 喜洋彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-9 スガキコ第2ビル2F TEL: 052-203-0281 FAX: 052-203-1884</p>	<p>(株)三和建築事務所</p> <p>取締役社長 見寺 昭彦</p> <p>〒455-0015 名古屋市長区港栄4-5-5 TEL: 052-661-2211 FAX: 052-661-2247</p>	<p>(株)中建設計</p> <p>代表取締役社長 石田 壽</p> <p>〒460-0008 名古屋市中区栄2-2-12 NUP伏見ビル 5F TEL: 052-222-7850 FAX: 052-222-7856</p>
<p>一級建築士事務所 デザイン スズキ</p>  <p>鈴木 利明</p> <p>〒440-0012 豊橋市東小鷹野4-4-8 TEL: 0532-61-4245 FAX: 0532-61-4215</p>	<p>(株)中建建築設計事務所</p> <p>代表取締役 廣瀬 高保</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄1-27-27 TEL: 052-262-4411 FAX: 052-262-4414</p>	<p>森建築設計室</p>  <p>森 哲哉</p> <p>〒468-0007 名古屋市中区天白区植田本町2-812-1 TEL: 052-807-3205 FAX: 052-807-3206</p>
<p>(株)ヤスウラ設計</p>  <p>代表取締役 水野 豊秋</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄2-35-6 TEL: 052-241-7211 FAX: 052-241-7333</p>	<p>(株)ワークキューブ</p> <p>桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰</p> <p>〒460-0024 名古屋市中区正木1-13-14 TEL: 052-265-8412 FAX: 052-265-8402</p>	<p>内田建築設計事務所</p> <p>内田 実成</p> <p>〒501-0514 揖斐郡大野町西方北野口791 TEL: 0585-34-3508 FAX: 0585-34-3509</p>
<p>(株)森本建築事務所</p> <p>代表取締役 森本 雅史</p> <p>〒518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4 TEL: 0595-65-2638 FAX: 0595-66-2639</p>	<p>(有)柏瀬紙店</p> <p>代表取締役 尾関 和成</p> <p>〒460-0016 名古屋市中区橋1-4-6 TEL: 052-331-8681 FAX: 052-331-8891</p>	<p>チヨダウーテ(株)</p> <p>代表取締役社長 平田 芳久</p> <p>〒510-8570 三重郡川越町高松928 TEL: 059-363-5555 FAX: 059-363-5553</p>

海岸線に続く岩礁からの潮騒。夏の日は遅く、漸くすると野間埼灯台は点灯する。秋の夜長、冬の伊吹降し風の悪天候にも休まず伊勢湾を航行する船の航路標識として照らしてきた。

野間埼灯台は知多半島の最西端、富具崎港の南、半島西海岸沿いを南北に走る国道247号線沿いの身近な沿岸に佇む。8海里届く初期国産の第五等フレネルレンズの灯器を採用した中型灯台として建てられ、今年

7月初点灯1921(大正10)年3月から100年を超え、国の登録有形文化財に登録された。

100年の歴史は長く、当初通信省から運輸省そして海上保安庁、現在は第四管区海上保安本部が所有する。灯台と共に思い起こされる映画『喜びも悲しみも幾歳月』に描かれた駐在生活を送る灯台守による保守は昭和59年迄続いた。野間埼灯台の竣工時の資料は大正12年の関東大震災で概ね失われ、暫く鉄筋コンクリート造と思われてい

たがその後の調査で無筋コンクリート造と分かった。地上から塔頂までの高さ18m、平均海面から灯火の高さ20m、下から基礎部、灯塔、回廊、灯籠が積重なり、その灯塔は白色円筒形直径3.8mから3.1mの円錐台で躯体壁厚が92cmから54cmもある。塔内部は内径約2m、螺旋階段のある4層構造に塔室の灯籠鑄物の冠蓋ドーム屋根が載る。平成11年には炭素繊維シート巻付にて耐震補強工事が完了。GPS航行が主流になり、平成20年灯器を白熱電球から荒天時も灯火が鮮明に視認できるLED電球に、電源を太陽電池と蓄電池に代え、今も伊勢湾の航行を安全に照らしている。

今年3月から、保存・活用に取り組んできた団体「(一社)美浜まちラボ」が「航路標識協力団体」になり単独で開放される日が増え、今は身近な登れる野間埼灯台です。

## 【概要】

登録有形文化財登録:令和4年7月  
所有者:第四管区海上保安本部  
住所:知多郡美浜町大字小野浦字岩20番1  
建築年代:大正10年3月初点灯  
構造:無筋コンクリート造



LED電球投器



灯台全景



塔室回廊から南遠望



塔室回廊から北遠望

編集  
後記

●新型コロナ感染対策の行動制限がない3年ぶりの夏となるはずでしたが、ここへきて新規感染者数が増

加に転じ、またも帰省や旅行にブレーキがかかってしまいました。後ろ向きな事が多いですが、私は日本の良さを改めて認識するきっかけができたと感じています。自身の行動制限はもとより、各種メディアも日本から飛び出すことができず国内の情報が増えたことで、まだまだ知らない伝統文化や名所があることを知ることとなりました。衣食住の全てにおいて驚きや感動に値するものが継承されており、それらについてまだ知らないことが多すぎると気付かされたのです。今号だけでも、建築家会館本館からカトリック清水教会、野間埼灯台や乳岩岬と多くの紹介があり、それぞれに興味深く拝読しました。次号以降

も素晴らしい建築や名所が紹介されることと想います。この建築家目線で綴られた情報をもっと広く知ってもらおうべきだと勝手に奮起した猛暑の夏です。(石川 英樹)

●今月号は通常の8頁から16頁での発行ですが、大変多様性に富んだ内容で、行間から執筆者個々の熱が感じられ、非常に読み応えがありました。卒コンにおいては、その無限の可能性にかけた学生の熱意と提案、それに真摯に応える審査員の熱意はもとより、「コロナ禍にあつて、いかに運営を円滑に、より有意義な事業にできるか?」運営委員会の熱意を記事から知ることができ、改めてJIAの意義を感じる事ができました。そんな中、横関浩さんのBIMに関する新連載は特に興味深いものでした。効率化のための手段として捉えられがちなBIMの本質はデジタル世界との接続により無限の拡張性を得て、新たな創造性につながることにあるとのこと。個人的にはその先

が容易には想像しづらく、BIMがより浸透し、一般化することで、例えば卒コンの提案も変わっていくのだろうか?などと夢想しましたが、次回以降の内容に興味深々です。(中澤 賢一)

後藤 文俊 (JIA 愛知)

(有)アトリエ後藤建築事務所



## ARCHITECT

第408号

発行日 2022.9.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会プリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/



# 「カトリック清水教会の保存活用に関する要望書」について

このたび、「カトリック清水教会の保存活用に関する要望書」を東海支部と静岡地域会の連名で出しました。これまで、カトリック清水教会が解体されようとしていることや、保存活用を望む信者を中心とした活動があることなどは新聞報道などにより知られていました。JIA静岡として、改めて保存活用要望書を出すに至った経緯について説明します。

5月に保存活動をされている信者の方から東海支部へ連絡があり、これまでの経緯や現在の状況等について説明いただきました。耐震性能不足のほか老朽化が進んでいること、所有者のカトリック横浜司教区としては解体・建替えの方針であること、昨年11月に天井材の落下があり使用禁止の状態にあること、具体的

な建替えの計画は示されていないことなどを知りました。そのような中、保存活用の道が無いか探っているということで、JIA静岡地域会にも協力依頼があり、まずはこの保存活用要望書を出すことになりました。様々な意見や立場があることは理解していますが、もう一度保存活用の検討ができないものかという趣旨です。

この報告にあわせて、カトリック清水教会の特徴や歴史的価値について、土屋和男先生（常葉大学教授）にわかりやすくまとめていただきました。



石橋 剛 (JIA静岡)  
静岡地域会長

# カトリック清水教会

## 設計者、ドラエ神父

カトリック清水教会は、1935(昭和10)年に竣工した。設計者には初代司祭であったフランス人、ルシアン・ドラエ(1884-1957)の名が記録されている。パリ外国宣教会のアーカイブによると、ドラエは1909(明治42)年に来日し、1914(大正3)年静岡に着任、以後、静岡県内で谷津(静岡市葵区)、清水、藤枝の教会を設計、建設した。戦時中も静岡、清水にとどまり、母国に戻ったのは1948(昭和23)年であったという。1950(昭和25)年には再来日し、伊東の教会を建てた後、1955(昭和30)年には静岡に戻ったという。施工者は不詳である。

## 西洋様式建築の教会堂

正面1階は4本の円柱に尖頭アーチが取り付く吹き放しの柱廊で、2階は薔薇窓と尖頭アーチの窓を開く。2階上部から双塔が突き出し、八角錐の屋根の最頂部には十字架を頂く。

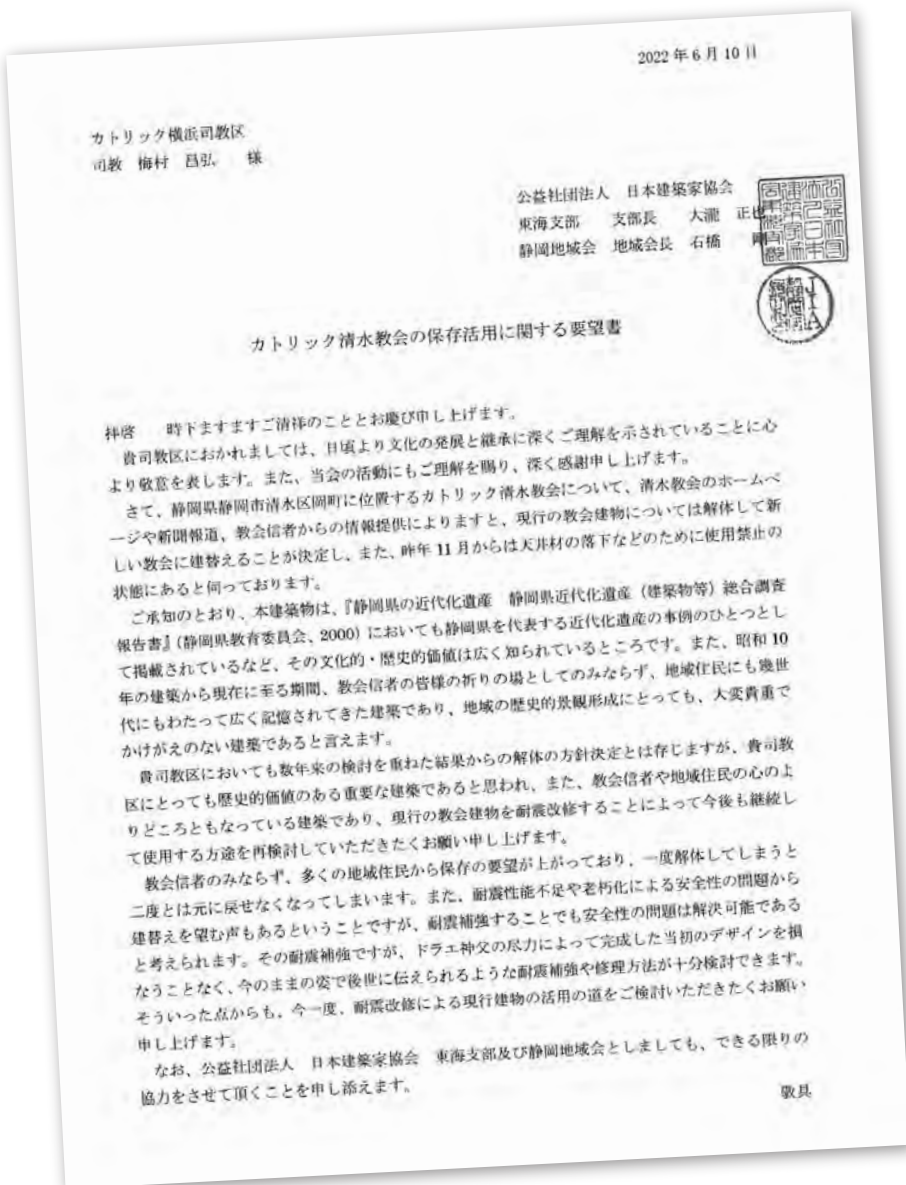
柱廊を抜け、入口扉前のアルコーブで靴を脱ぎ、室内に入る。バシリカ型3廊式の平面で、身廊は畳敷、側廊は板の間である。身廊と側廊は左右3本ずつの独立円柱によって分けられ、その柱頭はコリント式とイオニア式を合わせたコンポジット式である。そしてこれらの柱を尖頭アーチのリブヴォールトでつなぐ。柱、壁とリブは白、ヴォールト部分は水色に塗られ、広がりや抱擁感を感じる明るい空間となっている。側廊の窓にはステンドグラスが入る。祭壇は斜めの壁とリブヴォールトで空間の一体感をつくり出している。部分的な補修はあるが、建具、照明器具等を含め、ほぼ当初の姿を保っている。

ロマネスク、ゴシックの要素が各所に見られ、歴史的な西洋建築の様式を用いた教会堂として建築意匠上の価値が高い。

## 木造技術による「日本化」

この建築は木造である。組積造の西洋の様式を木造に置き換えている。日本の木造建築技術によって、西洋で誕生した形態と空間を現実のものとしているのである。

建設にあたっては、ドラエの構想、設計を理



# の建築について

解し、木造で実現する優れた技術者が不可欠だが、これについては残念ながら明らかではない。全体の寸法体系は尺寸法で設計、施工されており、伝統的な木造建築技術を身に付けつつ、新しい形態にも果敢に応える大工の存在が推測される。

特にリブヴォールトの空間を木造で実現した技術は特筆に値する。柱には大径の円柱を用いて、小屋組はトラスを採用し、そこから吊り木を下げ、天井下地の木ずりしに漆喰を塗ることで3次曲面のあるヴォールト天井をつくり出している。

この建築は日本の木造建築技術が新たな形態に挑んだ証左となるとともに、西洋で生まれた教会建築の「日本化」という意味で、木造教会建築としての価値が高い。

## 地域遺産・景観資源

この敷地は、徳川家康が造営した御浜御殿の跡地と伝えられ、清水港、巴川付近の低地から台地へと上がる場所に位置し、前面道路は坂道になっている。この特徴的な立地にある教会は清水の市中においてたいへんよく目立ち、人々の記憶に残る、景観上重要な建築となっている。

太平洋戦争中の空爆と艦砲射撃では周辺の市街地が焼失する中で、教会は被害を受けず、負傷者を受け入れる救護所となり、この時期にあってもドラエ神父はミサを行い、戦争の終結を祈ったという。

敷地の地続きには清水聖母保育園が設けられ、1949(昭和24)年以来同地で事業がなされている。このことは、カトリック清水教会の特徴ある建物を、70年以上にわたる間の子供たちが見続けてきたことを意味する。

この建築は地域の景観上、歴史上のシンボルとなっており、教会信者のみならず市民にも広く知られ、思い深い記憶を体現する地域遺産としての価値が高い。

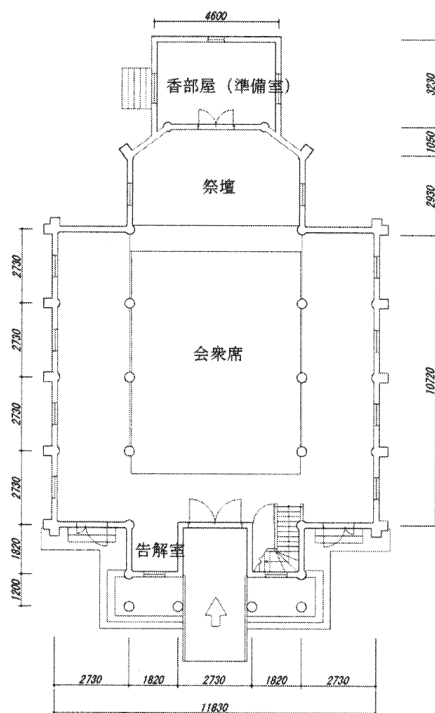


土屋 和男

常葉大学造形学部造形学科 教授



東側正面



平面図(静岡県教育委員会「静岡県の近代化遺産」2000より転載)



入口から祭壇を見る



祭壇前から入口を見る



木造によるリブヴォールト



坂道上からの景観

● 撮影: 土屋和男(2017年10月、2018年11月)